



知床科学委員会 しんぶん

海域ワーキンググループ No.7

知床半島の海域の保全に向けて、平成29年海域ワーキンググループでは次のようなことが話し合われました。

平成29年度は会合を2回開催しました。第1回目は、平成29年8月3日に斜里町で開催し、第2回目は平成30年2月15日に札幌市で開催しました。

話し合われた主な内容

○第3期海域管理計画について

遺産地域内海域における保護管理の基本計画である「第2期多利用型統合的・海域管理計画」（平成25年策定）が平成29年度で終了することから、次の第3期計画の内容について検討し、案をまとめました。

第3期海域管理計画のポイント

○目的へ海洋レクリエーションを追加

近年、観光船を含む海洋レクリエーションが増えていることから、計画の目的にそのことを加え、「海洋生態系の保全と持続的な水産資源利用による安定的な漁業の営み及び海洋レクリエーションなどの人間活動による適正な利用の両立」としました。

○指標種にスルメイカとシャチを新たに追加

モニタリングの対象である指標種に、新たにスルメイカとシャチを追加しました。スルメイカは、地元の漁業を支えていること、また、海洋の環境変化に影響を受けやすいことから追加しました。シャチについては、観光資源としても重要な役割を果たすことから追加しました。

○モニタリング成果の地元への提供の検討

知床の適切な保全のためには、地元の皆さんの協力が必要不可欠であり、モニタリング成果をわかりやすく皆さんにお知らせすることを検討します。

海域管理計画について

○海域管理計画とは

知床世界自然遺産地域内の海域における保護管理の基本的な考え方や保護管理措置の対応方針などを示したものです。有識者の助言や、地域の皆さんのご意見を伺いながら、環境省と北海道が共同で策定しました。第1期計画は平成19年に策定しました。

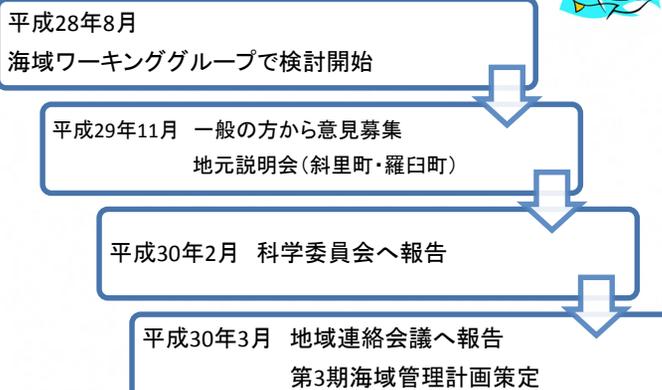
○目的

知床海域における海洋生態系の保全と、持続的な水産資源利用による安定的な漁業の営みの両立を目的としています。

○指標種

知床の海洋生態系を魚介類や海棲哺乳類などの5つの構成要素に分類し、さらにその中から知床の海域に特徴的なものを「指標種」として位置づけ、モニタリングを実施します。その結果に応じて、管理や利用方法の柔軟な見直しを行います。

<策定までの経過>



モニタリング結果からわかること

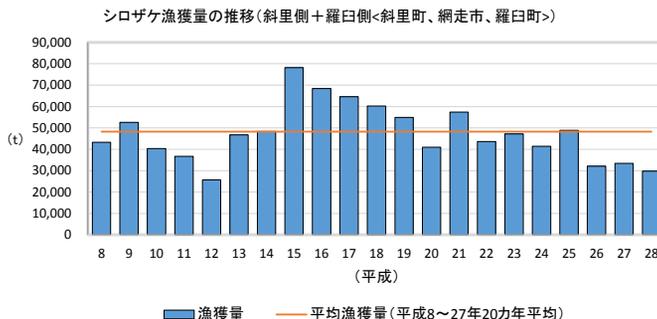
平成28年度に行ったモニタリングの一部についてご紹介します。

<漁獲量：サケ類の漁獲量の変化>

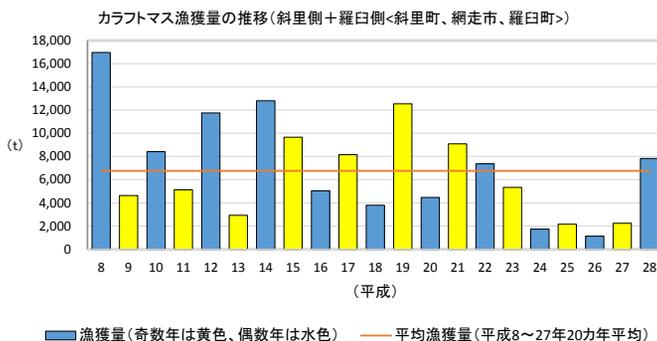
- ・シロザケの漁獲量（平成28年）は、斜里側（斜里町、網走市）が21,913トン、羅臼側（羅臼町）が7,824トン、斜里側・羅臼側合わせて29,737トンでした。各地域とも前年に比べて減少しました。
- ・カラフトマスの漁獲量（平成28年）は、斜里側（斜里町、網走市）が7,078トン、羅臼側（羅臼町）が756トン、斜里側・羅臼側合わせて7,834トンでした。各地域とも前年に比べて大幅に増加しました。



シロザケ(サケ、アキアジ)
漁獲時期：9月～11月
回帰年齢：3～7歳
平均魚体重：3.1～3.6 kg



カラフトマス(マス、ホークサーモン)
漁獲時期：7～9月
回帰年齢：すべての魚が2歳
平均魚体重：1.5～1.7 kg



上図：シロザケ・カラフトマス漁獲量の推移(斜里側、羅臼側)

作図データ出典：北海道「北海道水産現勢」
写真提供：さけます・内水面水産試験場

<これまでの経過：サケ類>

- ・シロザケは平成15～21年までは高い水準で推移してきましたが、平成22年以降は最近20年の平均漁獲量を下回る年が多くなり、平成26年以降はさらに少ない漁獲量となっています。
- ・カラフトマスは一年おきに豊漁と不漁を繰り返す傾向がみられ、平成14年までは偶数年が豊漁、奇数年が不漁でしたが、平成15年以降は奇数年が豊漁となりました。その後、平成24～27年は奇数・偶数年ともに漁獲量が激減しましたが、平成28年には6年ぶりに最近20年平均を超える漁獲量となるなど、最近は変動が大きくなっています。

会議の内容をもっと知りたい方はこちら

知床データセンター
<http://dc.shiretoko-whc.com>



第3期海域管理計画も
ご覧いただくことができます。

◆お問い合わせ先◆
北海道環境生活部環境局生物多様性保全課
〒060-8588
札幌市中央区北3条西6丁目
電話 011-231-4111 (代)
内線 24-357

<平成30年3月発行>

東京農大の網走キャンパスに着任した2004年から、知床沿岸の動物相を調べ始めました。「とりあえず」という気持ちで始めた調査でしたが、知床の岩礁の美しさと名も知られぬ小さな動物たちがすっかり魅せられました。沿岸動物相を通して、知床の環境保全に貢献したいと思います。



委員の千葉です

東京農業大学生物産業学部海洋水産学科教授。ベントス（貝や甲殻類など）を対象とした水産増殖について、基礎的な生態学的視点から考えています。